

## スペイン巡礼記（2012年春） 目次

### <2019年1月掲載>

(1) プロローグ

(2) 巡礼日記

4月24日（火）—25日（水）冒険への出発

4月26日（水）友との遭遇

4月27日（木）別荘への招待

4月28日（土）土砂降り

4月29日（日）旅は道ずれ世は情け

4月30日（月）皮袋（Bota）

5月 1日（火）巡礼宿の愛

### <2019年2月掲載予定>

5月 2日（水）もてなし

5月 3日（木）ポンチョの効用

5月 4日（金）ブルゴスの夜

5月 6日（日）いさかい

5月 7日（月）大脱走のマーチ

5月 8日（火）心の温かさ

5月 9日（水）フランスの道の魅力

5月10日（木）楽しい夕餼

5月11日（金）パエジャ

5月12日（土）最後の晚餐

5月13日（日）休息日

5月14日（月）山越え

5月15日（火）フランス人の町

### <2019年3月掲載予定完結版>

5月16日（水）ガリシアの屋根

5月17日（木）マラソン

5月18日（金）湖底に沈んだ町

5月19日（土）便利なポンチョ

5月20日（日）プルポの味

5月21日（月）旅は道ずれ世は情け

5月22日（火）星の降るサンティアゴ

5月23日（水）鐘の音

(3) 便利帳

(A) 持ち物で特に役立った物

(B) 注意事項

(4) エピローグ

## スペイン巡礼記

田中 実

### (1) プロローグ

何年前だったか、おそらく 30 年位前だったと記憶するが、当時某商社のチリ・サンチアゴ駐在員の時、社内報でスペインにサンチアゴという町があり、そこに通じるキリスト教の巡礼道があるということを知った。世界中には多くのサンチアゴという町があるということを知った。始めて知った。またサンチアゴがどういう意味かもよく知らなかった。イエス キリストの十二使徒の一人の聖ヤコブのスペイン語読みであることも。

サンチアゴという都市は手元の地図の索引を見ただけでも南米のパナマ、ブラジル、キューバ、アルゼンチン、ドミニカにあることが分かった。しかし世界的に有名なのは本家スペインのサンチアゴ デ コンポステラであろう。

スペインからの移民が多い多くのラテン諸国の民は祖国の由緒あるサンチアゴという地名を都市名としたのであろう。先日NHKで放送された開拓者たちというドラマでは満州の開拓地に作った町の名前を千振としたが、戦後日本に引き揚げの後、苦勞して開拓した那須の大地に千振という名前をつけたのも同じような動機ではなかったかと思う。

チリの初期の移民はスペイン ガリシア地方からの人々が多かったと聞くがチリの大地にサンチアゴという名前の都市を作ったのもうなずける。今ではこのサンチアゴはチリの産業、商業の中心都市として大きく発展、一方スペインのサンチアゴは長らく忘れられて来たと思われるが、フランスの道が 1985 年に世界遺産に指定された後は、観光の町として発展している。

キリスト教の巡礼の聖地は、サンチアゴ、バチカン、それにエルサレムの 3ヶ所であるが、バチカンは巡礼といっても観光地として俗化されており、一方エルサレムは中東のイスラエルという余り安全と思われない地理的問題があるため、世界遺産に登録され巡礼道が整備されて、更に安価な Albergue という巡礼宿があるフランスの道が脚光をあびているのもうなずける。

何時からこの道を歩きたいという夢が芽生えたかは定かでないが、55 歳で某商社を半ば首になり、チリの南部のプエルトモンという町の近くにある寒天工場に勤務しだしてからだと思ふ。この旅は普通の観光旅行というカテゴリからは程遠く、1ヶ月以上もの間、700-800km を毎日歩き続けるもので何よりも長期休暇が必要となること、当然体力も必要で既往症があれば生命の危険にもさらされるので健康は絶対必要、最後に目的地のサンチアゴまで絶対たどり着くという気力も大事である。

1 番目の長期休暇であるが、既に退職して毎日が日曜日である私には時間の問題はない。家内が働いている関係で家内の駅への送り迎え、更には同居している孫を保育園まで送る仕事があるため、家内の事前許可をとるのに大変であった。

体力であるが、12 歳から 30 歳までバスケットボールを熱心にやっていたお蔭で長年の不摂生があったとはいえ基本的には年齢の割に体力には自信があった。スポーツは長年ゴルフだけであったが、最近では暇を見つけては近所の山（標高 300m 程度）に上ったり、写真撮影でかなりの距離を歩いたりしていた。61 歳からは週 2-3 回フィットネスクラブに通うことを日課にしていた。更に週 1 回は淀川の河原を 10-15km 出来るだけ時速 5-6km で歩

くようにした。フランスの道と北の道を其々歩かれたサンチアゴ時代の他社の先輩には色々教えを乞うた。やはり出発前には重いリュックを担いで海岸を15kmも歩かれたそうで、小生も10回位10kgのリュックを担ぎ、スティックを突きながら淀川の河原を10-20km歩く練習をした。三浦雄一郎はエベレストに挑戦するため足に重石を着けて歩き回ったそうで重いリュックを担いで歩くことは本当に良い練習になった。淀川の河原はサイクリング道が整備されているので、本格的サイクリスト、ジョギング、速歩、散歩をしている人は多いが大きいリュックを担ぎスティックを使って歩いている人は無く、随分奇異に映ったと思われる。この巡礼で要求されるのは、持続力である。3番目は気力であるが、1ヶ月の間、毎日20-30kmの距離を10-12kgのリュックを担いで歩くので、多くの巡礼者は歩き始めて2-3日目には足首の上の腱が痛くなったり、靴擦れ、足裏の水ぶくれに悩まされることになる。これ位のことでへこたれては目的地のサンチアゴまでたどり着けない訳でここで気力が大事になる。多くの足痛は疲労からくるものなので、骨折していないかぎり2-3日休養すれば治るので2-3日はバスに乗って次の宿泊地まで行くというのも苦肉の策ではあろう。

こんなに苦しい巡礼の道を何故歩くのかは、各人各様である。統計によると宗教的目的がやはりトップであり、巡礼者の出身地をみても明白である。主な出身地はスペイン、フランス、イタリア、ドイツ、オランダ、アイルランド、デンマーク、ポルトガル、カナダ、フィンランド、オーストリア、オーストラリア、ハンガリー、スロバキア、エストニア、スロベニア、南アフリカ、南米ではブラジル、メキシコ、コロンビア、ベネズエラ等である。立派なカトリック国のアルゼンチン、チリ人は殆どいないのは、巡礼の道が知られていないのか、それとも金銭的に無理なのか、それとも怠惰なのかわからない。一度チリ人にこの疑問をぶつけて確かめてみたい。東洋人はキリスト教徒の多い韓国人が一番多く、日本人は少数派である。韓国人とは毎日巡礼道か巡礼宿のどかかであろうが、彼等のバイタリティーは凄い一語。ある巡礼宿では奥さんが米を炊いて明るる日に食べるおにぎりを作っていたのには驚いた。

巡礼者には大金持ち及び生活困窮者は殆どいないのではないだろうか。所謂中産階級が多いのではと思う。金持ちは巡礼ではなく国営の宿泊施設、パラドールという高級ホテルに泊まり、サンチアゴに近い楽な道を少し歩くという観光客であろう。

宗教的目的の次は精神的鍛練、文化に興味ある人、更には完全なスポーツ目的と続く。私は仏教徒であり既にバス旅行ではあるが四国88ヶ所を回ったり、西国33ヶ所のお参りを初めているが、その目的というと宗教、文化、精神、観光、スポーツ全てを含んでいる。要は好奇心を満たし体に良いことをして有意義にありあまる時間を使いたいという非常に単純な動機である。

季節的には巡礼者が最も多いのが7-9月で北半球の夏休み時期と一致する。特にこの季節は学生が多くかなり騒々しいとのことである。巡礼に最適なのは4-6月及び9-10月であり私は4月26日から5月22日まで27日間歩いた。4月の終わりから5月にかけてはぐずついた天気が多かったが、5月中頃からは安定した良い天気が続いたのは非常に幸運であった。

巡礼道はよく整備されているうえ、また黄色の矢印に沿って歩けば巡礼道見失うことはま

ずない。またガリシア地方では、巡礼のシンボルほたて貝とサンチアゴまでの距離を書いた道標（モホン）が街道筋に設置されており巡礼者を力付けてくれる。ガリシア地方では数頭の牛を飼っている農家が多いが、巡礼道を牛も歩く為、雨季になると牛の糞と泥で巡礼者を困らせるらしいが、私がガリシア地方を歩いたのは5月中旬から下旬で天気も良く巡礼道も乾いていたためその問題は殆どなかった。

年齢的には31-46歳が一番多く、その次に多いのは47歳から60歳までである。60歳を超えると巡礼者は激減するが70歳を超える巡礼者も時折見かけた。これら高齢者はかなり信心深い人なのであろう。

男女別では男55%、女性45%というところであろう。しかし巡礼宿では殆どが大部屋の2段ベッドであり、男女の区別はなくまたトイレ、シャワーも区別のないところが多いため女性はかなりの覚悟がいると思われる。各町には必ず巡礼者を当てにしたバー（Bar）があり女性はそこで用を足す必要がある。レオンの近くには17kmの間バーもトイレも一切なく野で用をたす必要があるが直線道路でまた障害物も無いため女性は覚悟が必要である。女性の中にはこの様なことは耐えられないため、この間はバスで移動する人もいたと聞く。巡礼を始める起点は個人の体力、利用できる時間により色々であるが、フランスサイドのサンジャンピエドポーから歩き始める人が18%、アストルガが15%、サリアが12%、サラゴサが10%、ロンセスバジェスが9%となっている。小生の歩き始めた牛追いで有名なパンプローナは2%と少数派である。日本人の多くはかなりの時間をかけ事前トレーニングを積んで旅にでる人が多くサンジャンから歩き始める人が大多数である。小生は出発から帰国まで32日間ということでパンプローナから出発した。サンチャゴの巡礼事務所で証明書をもらうためには100km以上歩く必要があるためサンチアゴから115kmのサリアから歩き始める人も多い。ここなら4-5日で完歩出来るため巡礼証明書を欲しい人には都合がよい。但し長距離を歩く本格的巡礼者には、観光気分で小さいリュックをかついで途中で騒々しく歩く人は多少迷惑である。

徒歩の巡礼者は75%、自転車は25%というところで巡礼者は1日20-30km、自転車の場合80-100kmと言われている。自転車の場合、タイヤパンク及び故障、又きつい坂の場合押して上がるのは大変だろう。

巡礼は宗教的、精神的目的が最も多いと申し上げたが、私の様に一人旅の人もかなり多く10%位はいるだろう。女性の一人旅もかなり多く見かけた。各人の歩行スピードが違うこともあり、一人旅の方が自分のペースで歩けるので宗教的、精神的目的で歩く場合は好都合である。しかし旅は道ずれ世は情けという諺もあるように、巡礼者は全て友達という思いが強くお互い励まし合って歩くので一人という寂しさは全く感じない旅である。

また街道筋に住んでいる人々も必ずブエンカミノ（buen camino 良い道中を）と言って励ましてくれる。それでは愈々巡礼へ出発である。

## （2） 巡礼日記 4月24日（火）—25日（水） 冒険への出発

1月にフィンエアーのフライトを（関空—ヘルシンキー—マドリッド）予約していたので、6時半関空行きバスに乗り込むべく家を6時に出発してバス停に着いたが全て予約で埋まっているので乗れないと言われて唖然とした。予約していないことを後悔したが後の

祭りで急ぎょ電車で関空まで行くことになる。今回の旅は今までの旅行とは全く異なり、トレッキング用靴をはいて、更には背中にはスティックを入れた 10kg のリュックを担ぐ山登りスタイル。かなり緊張しているが、最初から小トラブルで先が思いやられる。フライト出発は 10 時 35 分なのでまだ時間は十分ある。早めに家を出て本当に良かった。スペインは夏時間を実施しているので日本との時差は 7 時間でマドリッドに現地時間夜 8 時に到着する。マドリッドからパンプローナまではイベリア航空で 40 分。関空を出発してからパンプローナまで約 20 時間かかったが、緊張しているので疲れは感じない。ホテルにてゆっくり休息して翌日は、巡礼手帳 (credencial) を Palacio Arzobispal ((大司教の館)にて取得、巡礼ガイドブック (El camino de Santiago a pie) の購入、食糧の調達、時差調整、観光にあてる。大司教の館ではおばさんが親切にしてくれ、神の祝福をと言って励ましてくれる。

7 月には牛追いの祭りがあって賑わうが、あいにく雪がちらつく様な悪天候で、まだ観光客は少ないようである。生ビール付巡礼定食を食べて、3 時頃セントロにある巡礼宿 (Albergue municipal Jesús y María) にチェックイン。宿泊料は 7 ユーロ。ここではベッドカバーをくれるので清潔な感じである。古い建物を改造して建物の中は小奇麗になっているが、大部屋の 2 段ベッドであり、また生まれて初めて寝袋を使うので寝心地は悪い。2-3 列先のベッドにスペイン人らしきグループが騒々しく話あっている。彼らが今回の旅の仲間となるとはその時は知る由もない。夜 10 時には消灯になるので、それまでにベッドに潜り込む。しかし明日から長い巡礼の道中が始まると思うと興奮してなかなか寝付けない。



Río Alga (アルガ川)



パンプローナの遊歩道

**4月26日(水) 友との遭遇** Pamplona-Puente la Reina 24km 7時間45分 雨後曇  
パンプローナからサンチアゴまでは 708km の距離である。プエンテラレイナまでは 24km だが、Alto del Perdón 780m の峠を越えるちょっときつい行程。第一日目というのに、朝から小雨で肌寒く、上下ともレインコートを着て 7 時 15 分に出発。巡礼初日で何もわからないので例のスペイン人グループが出発するのに合わせて出発する。グループに入れてくれとは言わなかったが、歩いている内に何となくグループに受け入れてくれる。彼らは英語はしゃべらないので、スペイン語を話す小生に親近感を持ってくれた模様である。厚着をしすぎたこと、更に 2 リットルのミネラルウォーターを持っていたため荷物が重く、汗かきの私は汗みどろになり、更にちょっと風気味で微熱があるため調子が悪い。パンプローナの町を数 km 歩いてやっと郊外に出るとだらだらとした登りが続く。山道に入

ると Alto de Perdón を目指してかなりきつい登りとなる。途中多くの風力発電の風車をみかけた。やっとの思いで頂上に到着したが、雨で全く視界はきかない。しかしここで初めて彼らと写真に収まりグループ入りとなる。

Julio(59 歳), Jesús (59 歳), Faustino (52 歳) は同じスペイン北東のサンセバスティアン (San Sebastian) という風光明媚な町に住み同じ職場に勤めていたが、工場閉鎖で解雇されたとのこと。Pepe (59 歳) はバルセロナ出身で既に退職。Pedro (37 歳) はコルドバ出身でオリーブ油の会社に勤めているが彼も秋まで一時帰休とのこと。これを聞くと今更ながらスペインの厳しい経済状況を垣間見る思いがする。各人各様、皆面白い個性をもっている。Julio は話好きで歩いている最中も絶え間なくしゃべっている典型的なスペイン人。Jesús は学者風で芯は強そうだが腎臓を片方とっているのちょっと病弱である。しかし思いやりのある人。Faustino はまだ若く元気で勝気な人だが、面倒見が良く、買い物、自炊をした夕食後は率先して皿洗いをするなど献身的である。小生にもリュックは前日に全て準備するのが良いとか、巡礼宿では部外者が忍び込んでもわからないので盗みに気をつけろ、とか色々参考になるアドバイスをしてくれた。Pepe と Pedro は Roncessvalles から彼らにジョインさせてもらっている。Pepe は一番インテリで建築、歴史にも詳しくゴシックやロマネスクの違い等色々教えてくれた。Pedro はやんちゃな青年でグループに付いたり離れたり気ままに歩いている。早口で聞き取りにくいスペイン語をしゃべる。

下りにかかったところでやっとな雨も降りやんでくる。Óbanos は Puente la Reina まで 2.3km だが Camino Aragonés への分岐道に入って Santa Maria de Eunate(12 世紀に建造された 8 角形で 100 の入り口があるという教会)を見学。このため 3.5km 余分に歩くことになる。しかし Camino Aragonés への入り口で Jesús が足の甲が疲労のため痛くて歩けないと 30 分ほどしゃがみこむというアクシデント。漸く回復してそろりそろりと歩きだす。小生も初日でかなり疲れて足も痛く最後の 3.5km は本当にきつかった。

パンムローナはナバラ州だがこの近辺は大規模な小麦畑が延々と続いているので緑の絨毯の景色は非常に美しく絵になる。巡礼宿は Albergue Padres Reparadores で 4 ユーロ。巡礼宿到着後、巡礼定食を食べる。Caña(生ビール)、vino tinto(赤ワイン), ensalada mixed(サラダ盛り合わせ)、pollo con patatas fritas(ローストチキンとフライドポテト)で 11 ユーロと良心的な値段である。



Alto de Perdón で (左端が私)



菜種の咲く風景

4月27日(木) 別荘への招待 Puente la Reina-Estella 22km 6時間 曇り後晴れ  
街道沿いの bar(バー)で café con leche(コーヒー牛乳)とクロワッサンで美味しい朝食を  
とり、Rio Arga に掛かる石作りのレイナ橋を渡る。今日も曇り空。今日は距離も短くそ  
れほどの起伏もないので比較的楽な道。道中で日本女性 黒田涼子さんと会い暫く一緒  
に歩く。彼女はフランスの Le Puy から巡礼を始めたらしく随分フランス人に助けられたと  
いう。更に 66 歳の日本人男性とも会う。彼はこのフランスの道に魅せられて既に 3 度目  
とのことだが、短期の休みしか取れないのでまた来年も来る予定とのことであった。花が  
好きで道中で見つけた珍しい花の写真を撮るのが楽しみだと言われていた。巡礼宿には泊  
まらず主にホテルに宿泊するとのこと。1 と月も巡礼にでられる私は幸せなのかもしれな  
い。Estella ではスペイングループの元社友 (Txomin Perez チョミン ペレス) が持って  
いる別荘に宿泊するから私も良かったら同宿したらと勧められたので喜んでお受けする。  
巡礼道の傍らにある別荘で綺麗な山並みが見張らせてすばらしい。昼はオーナーの手作り  
料理、サラダ、ワタリガニ、豚テキ、パエジャ、スープをよばれる。まだグループに入っ  
て 2 日目だというのに大変親切にしてもらい感謝の念に耐えない。食事の後、車で Bodega  
Irache (イラチェのワイナリー)を見学。蛇口をひねるとワインと水がでてくるので巡礼  
者はこれを飲んで巡礼を続ける。(fuente de vino ワインの泉)。この様に巡礼者を暖か  
く迎えてくれることは非常にうれしい。しかし不届き者がいて備え付けのコップを盗むも  
のがありとみえて、1 ユーロで買って欲しいと書いてあった。またインターネットカメラ  
の設備があり、ペペが息子に電話して確認したところ確かに元気な親父の姿が見えると喜  
んでいた。今後ここを訪れる日本人の方、是非家族に連絡して元気な顔をネットで見ても  
らってください。

その後近くにある Irache 修道院を見学。教会のお嬢さんが親切に案内してくれた。町に  
はイラチェワインの立派なクラブもあり、その敷地にはレストラン・バー・芝のサッカー  
場があり子供たちが元気にサッカーの練習をしていた。この様な綺麗な芝生のサッカー場  
でプレーできれば上手くなり、スペインサッカーのレベルが高いのもうなずける。  
ペペが途中で右足の足首の上が痛くなり歩けなくなり途中からバスに乗って Estella に到  
着。もう歩けないかもしれないと弱気なことを言うので皆で励ます。



ラレイナ橋



イラチェの葡萄酒給水場

4月28日(土) 土砂降り Estela-Los Arcos 21km 6時間 曇り後雨

ペペの足は回復しないのでTxominの車で一足先にLos Arcosに行つて巡礼宿のベッドの確保、夜食の食材を購入しておくという。ちょっとカゼ気味であると話していたところ、重いリュックをLos Arcosまで運んでやるというので好意に甘える。小さいリュックに雨具と水、食料を入れて出発する。食料はミカン、ビスケット、チョコレート。巡礼道の近辺には殆ど工場もなく、川の水も非常に綺麗なので水道水でも全く問題ないというので何時も水道水をペットボトルに入れて持参する。殆どこの水を飲んだが腹を壊すことはまずなかった。



巡礼道



ロスアルコスの巡礼宿

Estellaは海拔420m位だが、Villamayor de Monjardinの620mまでは登り道が続く山道である。Los Arcosまで4-5kmのところ土砂降りの雨となる。小生とFaustinoはグループの先頭を歩いていたが、フルスピードで歩き出す。しかしFaustinoは若く足も速いのでとうとう置いて行かれて一人で歩くことになる。Los Arcosの町に到着して巡礼道を進んで行くがAlbergue Municipalには中々到着せず心細くなってきたが町はずれにやっと見つける。比較的新しいAlbergueで6ユーロである。この宿には日本女性1人と黒田さんが遅れて到着した。やはりずぶ濡れとなっており可哀そうである。靴もかなり濡れているので靴の中に新聞紙をつめて乾かすことにする。

4月29日(日) 旅は道ずれ世は情け Los Arcos-Logroño 28km 7時間 曇り

今日も曇天。Pepeの足は依然回復しないためバスでLogroñoまで移動するという。Sansolにて彼らの元同僚の家でコーヒとクロワッサンをよばれる。今日は28kmと距離も長く、更にTorres del RíoからVianaまではアップダウンの続く山道が続く。今日は体調も良く薄着としたので歩きやすい。Torres del Ríoの休憩場で休憩していると日本女性2人に抜かされる。立ち話したところではゴールデンウィークを利用してLos Arcosから歩き出したとのことで来週月曜日早朝には日本に着いてそのまま出社するという。今回はBurgosまで歩いて又来年Burgosから歩くという。本当に嬉しい。

かなり疲れて2時半にAlbergue Municipalに到着するが受付人は他の巡礼者の受付を行っているので外で待てという。受付手続は極めて緩慢で多くの巡礼者が到着してくるが我関せずで埒があかない。その間近くの食料品店で缶ビールを買い込み皆で飲んで我慢して待つことにする。道中では彼らは余りBarに入らずまたビールも飲まない。長距離を歩い



て来た後ということでビールが五臓六腑に染み渡る。

巡礼定食を食べて巡礼宿に帰ってくると先ほど Viana で会った女性が足の裏が痛くて歩けないと言って例の受付の男に診察してもらっている。軽いマッサージをしていたが全く回復しない。ひょっとすると疲労骨折ということもあるので、彼女(西山さん)を促して病院に行くことにする。‘旅は道ずれ世はなさけ’とうことでタクシーに乗って市内の San Pedro 病院に行く。巡礼手帳を見せれば診察は無料で 30 分程またされた後、医者が診察してくれる。足の色々な場所を調べた後、‘骨に異常はない’とのことであった。疲労によって痛くなったので、歩くのは諦めて暫く静養するようにとの見立てだった。巡礼宿は基本的には 1 泊だが、この様な場合は連泊も許可してくれる模様である。例の受付の男は良いことをしてくれて有難うと言ってくれた。(但し事後談ながら帰国後請求書が彼女に届いたとのことで全ての病院が無料ではないようである。)

Logroño はかなり大きな町ではあるが、日曜日ということでレストラン以外は開いていない。中心街 (Centro) には Iglesia de Santa Maria de Palacio という立派な教会がある。しかしスペイングループは余り信仰深くないとみえて教会には全く興味を示さない。唯一 Pepe だけは興味を持っている模様である。



エブロ川 (ログローニョ)



巡礼道

4月30日(月) 皮袋 (Bota) Logroño-Nájera 31km 7時間30分 曇り後晴れ

今日は 31km、Logroño 400m から 680m まで登る。一帯はブドウ畑が広がる。今日も体調は良好でグループの先頭を進む。しかし Navarette で 30 分も休憩したため、再度歩き出すとき足が痛くて調子がでない。Ventosa を経由すると遠回りになるので遥か前方を歩く Faustino の指示で国道沿いをまっすぐ進む。Alto de San Antón までの登りで例の写真好きの日本人男性と会って暫く一緒に歩く。彼は小さ目のリュックを背負っているのでかなりのスピードだが、一生懸命歩いたお蔭で何とか彼と同じペースで進む。Nájera の町に入り美しい Río Yalde の橋を渡り左方向に行った所の Albergue Municipal に投宿する。ここも設備はなかなか綺麗である。受付はイタリア人の真面目そうな男性で感じが良い。ここは宿泊料金は Voluntad(心付け)なので 5 ユーロを収める。Río Yalde の両岸には綺麗な芝生が生えそろうっており清流が美しい。今日は月曜日ではあるが町では青空市場が出ているので観光客、巡礼者でにぎやかである。広場では鷹匠が鷹とフクロウを巧みに操るアトラクションを行っており非常に興味深く見させてもらった。青空市場でヤギのチーズを買

って冷蔵庫に入れておいたが明るる朝それを忘れてしまったが誠に残念であった。  
昼飯には仲間に薦められて Puches (まめの煮込み) を食べたが美味しかった。夜にはサラダを食べながら Julio の Bota (革袋) でワインを巡礼者たちと回し飲みした。巡礼者の殆どはスペイン人ではなく初めての体験で楽しく夜も更ける。  
巡礼宿では 4-6 時は昼寝、10 時には就寝、6 時に起床と非常に健康的な生活となる。昼寝をするため夜はよく寝られない日が多いが、6-7 時間歩いた後の昼寝は止められない。ベッドに体を横たえると足がジンジン本当に疲れているのがわかる。殆どの巡礼者は昼寝を日課に組み入れているようである。



ナヘラ



鷹匠

**5月1日(火) 巡礼宿の愛** Najera-Santo Domingo de la Calzada 21km 晴れ  
21km と距離も短く今日は快適な道が続く。朝 7 時に出発して 12 時に Albergue Abadia Cistericiense に到着。内部は非常に綺麗だがここも Voluntad である。昨日 と打って変わって巡礼道の回りには小麦畑が広がって非常に美しい。しかし地道はまだ乾いておらず歩きにくい。北の方の山々にはまだ残雪がある。暫く休んだお蔭で Pepe はかなり回復してきたので Cirueña までバスで行ってそこから歩くという。  
Santo Domingo は城壁に囲まれた小さい町だが教会の尖塔にはコウノ鳥が巣を作っている。この後各町でコウノ鳥をよく見かける。人間が少なく自然が豊かでコウノ鳥も住みやすい環境にあることがわかる。日本も豊岡だけでなくもっと多くの町でコウノ鳥が住めるようになればよいのだが。この町では鶏が子供の身代わりになった伝説が語り継がれており、大聖堂 (Catedral) では今も 2 羽の鶏が飼われている。  
教会には 50m 位の塔があり天辺まで階段を歩いて登れる。そこからの眺めは遠方に雪を頂いた山々、眼下には白壁、オレンジ色のレンガ屋根の街並みが広がり非常に美しい。  
今日は 12 時に巡礼宿に着いたので時間もたっぷりあり、ちょっと肌寒いが生ビールを飲みながら至福のひと時を過ごした。  
足にまめを作っている人、足を痛めた人が、Albergue に出張してきた医者が無料で治療を行っていた。患者はひっきりなしで巡礼者を大事にしていることがわかる。手洗いで洗濯した後、ロープに吊るす時、安全ピンは非常に役立った。巡礼宿ではスティックをスティック入れに入れておくと、名前をシャフトに貼っておくと間違われずに良かった。更に靴を靴置きに置く時、良く似た靴も多いので、名前を書いた紙を靴に入れておいた。



コウノトリ



小麦畑の巡礼道

「5月 2日（水）もてなし」会報電子版2月号へ続く

（たなか みのる：元ニチメンアルヘンティーナ社長）